



こころを育む
総合フォーラム

こころを育む総合フォーラム

2021年度 活動報告書

公益財団法人 パナソニック教育財団



こころを育む 総合フォーラム より

「こころを育む総合フォーラム」は、日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、はどめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。

設立以来、日本人のこころのありようについて討議を重ね、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめ、発表しました。提言では、家庭・学校・地域・企業の4つの分野に、それぞれの立場で子どもたちのこころを育むことを「問い」のメッセージとして呼びかけました。

2008年、この提言内容を全国に広げるために、全国運動を始めました。毎年、全国各地で取り組まれている子どもたちのこころを育む活動を募集し、中でも特に優れた活動を表彰し、広く紹介しています。

2019年、鷺田清一を座長に、新たな体制で第二期をスタートしました。自薦に加え、推薦での応募もできるようにすることで、より多くの活動に光があたるようにしました。

本書が、「こころを育む」環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

活動の経緯

- 2005年** 「こころを育む総合フォーラム」発足
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足
- 2007年** 議論をまとめた「提言書」をプレス発表
発足から計18回の討議を経て、提言書を公表
- 2008年** 「全国運動」スタート
全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む”活動の募集・表彰を開始
- 2011年** 東日本大震災支援活動（トヨタ財団との共同プロジェクト）実施
「子どもの居場所づくりと次世代の育成」に向けた取り組みの支援を実施（～2013年）
- 2013年** 「有識者対談」WEB連載（東洋経済オンラインとの共同企画）
山折座長を中心に有識者メンバーと「日本人としての教養～次世代に継承したいこと」をテーマに対談（～2015年）
- 2015年** フォーラム活動10年
東京にてフォーラム活動10年特別シンポジウムを開催
- 2017年** 全国運動10年
10周年記念表彰式
- 2019年** 「第二期 こころを育む総合フォーラム」をスタート
鷺田座長を中心に新たなメンバー11名でスタート

提言書

2007年、フォーラムの思いを提言書にまとめて公表しました。家庭・学校・地域・企業の4つの分野で、子どもたちのこころの育みのために大人たちができることを、自己の内心に向かって問いかける「七つの問い」の形で呼びかけています。

具体的には、家庭に向けて「親（保護者）の姿勢が、子どものこころを創っているという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか」など、4分野それぞれに対して「七つの問い」を提案しています。

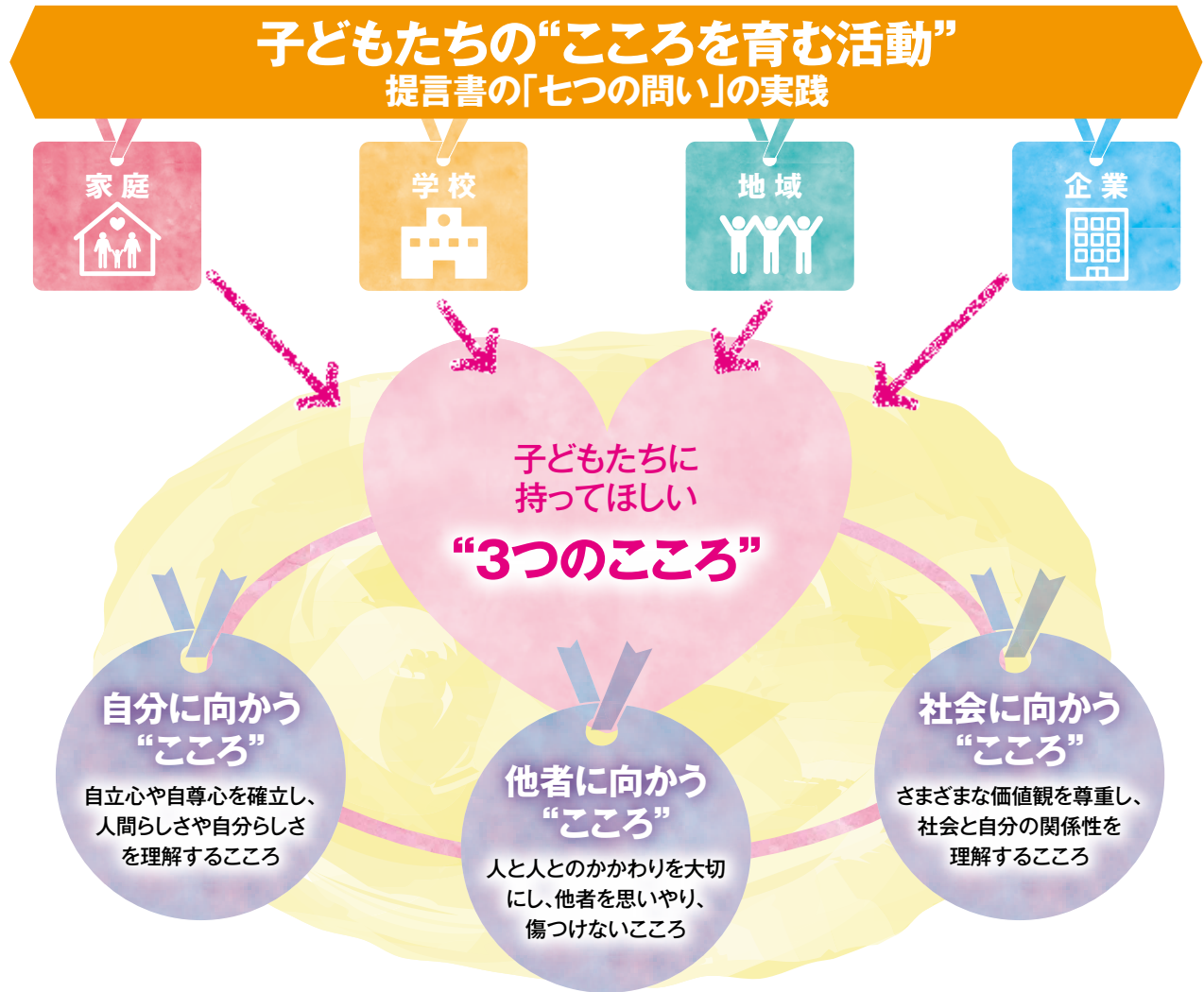
提言書の詳細は、「こころを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。

<http://www.kokoro-forum.jp/project/message.php>



フォーラムの目指す姿

家庭・学校・地域・企業などで取り組まれている「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、子供たちに持ってほしい“3つのこころ”をバランスよく育むことを目指しています。



「こころを育む総合フォーラム メンバー」



座長
鷺田 清一
大阪大学 名誉教授



今村 久美
認定NPO法人
カタリバ 代表理事



入江 杏
文筆家、「ミシュカの森」主宰、
上智大学グリーンケア研究所
非常勤講師



小国 綾子
毎日新聞
ジャーナリスト



工藤 啓
認定NPO法人育て上げネット
理事長



玄田 有史
東京大学
社会科学研究所長



鈴木 みゆき
國學院大学 人間開発学部
子ども支援学科教授



福田 里香
パナソニック株式会社 CSR・
企業市民活動担当室 室長



増田 明美
スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学 教授



山極 壽一
総合地球環境学研究所 所長、
前京都大学総長

2021年度 子どもたちの“こころを育む活動”表彰式



2022年2月8日、「2021年度 子どもたちの“こころを育む活動” 表彰式」をオンライン(ZOOM)にて開催いたしました。表彰式の内容はYouTubeでも配信され、協力団体、フォーラムメンバー、当財団役員など40名以上の皆様にご視聴いただきました。

表彰式後のオンライン座談会では、「地域コミュニティが子どもたちのためにできること」をテーマに、受賞団体代表者とフォーラムメンバーの幹事2名による活発な意見交換が行われました。

ごあいさつ・講評

はじめに、当財団の小野元之理事長より、続くコロナ禍の中でも子どもたちが前向きに生きていけるようにと地域の最前線で活躍する団体の皆様へ、感謝と支援の気持ちを伝える言葉が贈られました。また、来賓を代表して文部科学省総合教育政策局より社会教育振興総括官の根本幸枝氏から「コロナ禍で制限がある中、日本の未来を担う子どもたちのために、立ち止まらず、さまざまな工夫のもと、素晴らしい体験を提供していただき、感謝申し上げます。受賞を機に活動が一層充実し、多くの子どもたちに活動の機会が広がることを期待しています」との温かいご祝辞をいただきました。

続いて、各受賞団体の活動を動画で紹介し、フォーラムメンバーで今年度幹事の福田里香氏(パナソニック株式会社 CSR・企業市民活動担当室室長)より全国大賞1団体、優秀賞3団体が発表されました。表彰を受けて、表彰団体の代表者からは、感想や今後の抱負などが語られました。

最後に、フォーラムメンバーで幹事の鈴木みゆき氏(國學院大学 人間開発学部 子ども支援学科教授)より、次のような総評をいただきました。「主体性、応答性、多様性の3つを大きな柱と考えました。主体性とは〈子どもの主体性をどのように育み、それがどのように表れているか〉ということ。応答性では〈子どもたちが、大人と子ども、子ども同士の中で感性を働かせ、何かを感じ、工夫し、知識や技能が増え、自己発揮ができているか〉など。多様性では〈多くの世代、異業種、職業人、大学生など、さまざまな方が関わっているか〉などです。これらの柱を大切に考え、4団体を選びました。この先もぜひ、活動を続けていただけたらと願っております」



主催者挨拶
パナソニック教育財団 理事長
小野元之氏



来賓ご挨拶
文部科学省総合教育政策局
社会教育振興総括官
根本幸枝氏



プレゼンター
フォーラムメンバー
福田里香氏



幹事総評
フォーラムメンバー
鈴木みゆき氏

祝辞

受賞された皆さま方おめでとうございます。

子どもたちの支援においては、「いろいろな世代、職種、性格、境遇の大人がいて、いろいろな生き方がある」と、生き方の選択肢を広げてあげることが大事です。しかし、皆さまには、コロナ禍で行動が制限され、この「ごちゃまぜ」の交流が非常に困難になっていることに悩まれているかと思います。

子どもたちのこころを育むとは、言い換えると子どもたちの世界への窓を開くことだと思います。「ここは本当に自分の場所なのか」と疑問を抱く子どもたちに「こんな世界や生き方がある」と示し、軌道修正をするときには応援し、支えてあげることが子どもたちの世界への窓を開くことではないでしょうか。

そこで大事なのは、未知なるものに取り組んで切り開く「冒険」と、失敗してもやり直せる「安心」です。帰るところがあるから旅に出られるように、両方があるから世界に向けて自分を開くことができるのではないのでしょうか。挑戦に失敗しても安心してやり直せる「安心感を持てる場所を用意すること」が大人たちの責任であり、子どもたちが挫折しても立ち直り回復する力を育てる、また大人もそれを一緒に考えながら育てることが、こころを育むということだと思います。

コロナ禍で増加したオンラインのコミュニケーションは、学校や友だち関係で辛い思いをしている子どもたちの精神的負担を減らし、コミュニケーションの可能性を広げてきました。しかし、身体が向き合い、触れあうコミュニケーションをベースにして初めて、オンラインはツールになることを忘れてはいけません。

触れあい、視線を合わせた経験にこそ「独りではない、みんなと同じ場所で生きている」という自覚や安心感が持てるのだと思います。オンラインではそれができません。目を合わせ、触れあえる距離で傷つけあい、かさぶたを作ることで、思いやりのある強いこころを持つようになると思います。そのベースがあって、オンラインのコミュニケーションが楽しめるのではないかと思います。

コロナ禍でかじかみ、縮こまっている子どもたちの存在を、のびやかに大らかに開いてあげたいと強く願います。大事なものを見失わず、臨機応変に知恵を出し、焦らず取り組む。そのような大人の経験に基づいた知恵を、「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、これからも皆さまと共有したいと思います。



座長
 鷺田 清一氏 (大阪大学名誉教授)

オンライン座談会「地域コミュニティが子どもたちのためにできること」

表彰式に続き、フォーラムメンバーの鈴木氏、福田氏、および受賞団体の代表6名により、上記テーマによるオンライン座談会が開かれました。地域と子どもたちの未来をより良くしたいと日々奮闘する皆様からは、実感のこもった現場の生の声が届けられ、コロナ禍での工夫や気づきなどについても活発に意見が交換されました。

地域での活動から得られた実感として「田植～収穫までを教える中で、こぼれた米を集めるなど食べ物を大切にすることが育まれている」「〈こどものまち〉は安心して失敗できる環境。子どもたちを信じて見守ることが必要と気づけた」など、地域に根付いた子どもの成長ぶりや世話役を経験した若者の感想が語られました。

コロナ禍における工夫や気づきとしては「取材や会議をオンラインにし、訪問人数を制限して記者活動をゼロにしない工夫をした」「カフェを飲食なしで居場所として提供。休校により、不登校の子も登校していた子も〈ごちゃまぜ〉となり、うまくなじんでいる。コロナ禍明けの企画案が増えた」などの事例が報告されました。

最後に、福田氏は「挑戦を応援しつつ」鈴木氏は「凸凹のいい連帯感で」一緒にやっていきたいと決意を表明。コロナ禍で増した地域コミュニティでの居場所の大切さや、介入せず見守る姿勢の必要性、子どもたちの成長に気づいた出来事など、事例を通して実感のこもる気づきが語られました。各団体の地域特性を生かした個性的な活動とその成果に驚きの声や賞賛の拍手が起こり、オンラインながら繋がりをを感じる座談会となりました。



パネリスト

鈴木みゆき氏、福田里香氏、受賞団体代表6名

- 沼辺笑楽寿来 (宮城県) 渡辺 安光氏
 - 認定NPO法人ミニシティ・プラス (神奈川県) 岩室 晶子氏
 - 一般社団法人Ponteとやま (富山県) 水野 薫氏、加藤 愛理子氏
 - 特定非営利活動法人インフィーニティー (長崎県) 野口 美砂子氏、布志木 美名氏
- ※表彰式およびオンライン座談会の動画は、ホームページでご覧いただけます。

2021年度子どもたちの「こころを育む活動」受賞団体

全国大賞	一般社団法人 ^ポ ンテとやま (富山県)	P6
優秀賞	ぬまべしょうがくじゅく 沼辺笑楽寿来 (宮城県)	P8
	認定NPO法人 ミニシティ・プラス (神奈川県)	P10
	特定非営利活動法人 インフィーニティー (長崎県)	P12

受賞団体 活動紹介



ボ ン テ
一般社団法人 **Ponte** とやま【富山県】

ごちゃまぜの中で育つ～つながる・まなぶ

選考理由

誰でも簡単に居場所づくりが始められることを示した好事例です。大人も肩の力を抜いて楽しんでおり、「ごちゃまぜ」の多様性が新たな出会いや気づきを生み出しながら、子どもたちの自己有用感や社会性が育まれている点が高く評価されました。

活動の概要と目的

庭に建てたカフェは子どもたちの居場所となり「ごちゃまぜ」の交流が元気と自信を育んでいます。

自宅の庭に建てたカフェを拠点にした居場所づくり活動です。

一方的な支援ではなく、子どもたちが安心して主体的に楽しみ、自信をつけ、希望を持てる機会をつくりたいと2014年に活動をスタート。

ここでは、不登校や発達凸凹、健常を問わず、あらゆる子どもたちが、生きづらさを抱えた若者や個性豊かな大人たちと「ごちゃまぜ」のなかで交流しながら学び、元気を充電しています。

カフェでの居場所活動「フリースタイルスクール」では、「勉強もゲームもOK!」と、互いの個性やペースを尊重し合って過ごしています。ほかにカフェの仕事体験や臨床美術アート、園芸療法プログラム、山歩きなどの野外活動、運動教室に学習・就労サポートなど、多彩なプログラムを展開。子育て相談会なども開催しています。

子どもたちは、ここに居場所を得て安らぎ、「ごちゃまぜ」の交流やワクワク感あふれる多彩な体験の中に、自分の役割を見つけて自信をつけています。



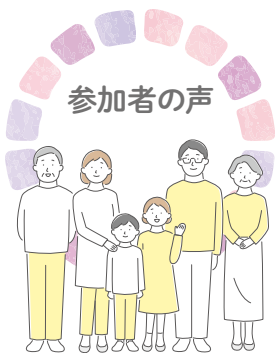
居場所活動「フリースタイルスクール」では、互いを尊重し合って過ごします。コロナ禍には、不登校の子たちと休校で訪れた通学生たちが上手に共存していました。



「キッズカフェ」では発達凸凹のある小中学生がカフェの仕事体験。不登校の子が5年を経てラテアートの名人となり、高校進学を決めたケースもあります。

子どもたちの変化・成長

自分らしく安らげる居場所は浸透し、SNSにもカフェの話題が登場。「ごちゃまぜ」の交流は多様性を認め合う機会となり、さまざまな体験から得意なことや目標が見つかるなど、主体性・自己有用感・社会性が育まれています。



参加者の声

このカフェ気に入っちゃった。
2号店をつくってください。(小学5年生)

へびと遊んで、お話を聞いて、意外と知らない日本の生き物についてよくわかって楽しかったです。
(小学6年生)

「キッズカフェ」は、レストランなどの接客業の体験にもなると思っています。
(中学1年生)

私が自立するまで、カフェやめないでね。
(中学2年生)

いろいろな個性を持った人たちが集まって良い雰囲気を作っているカフェだと思う。(中学1年生)

みやの森カフェはわくわくする遊園地みたいだ。
(20代)

とっても楽しかったらしく、タッチオープンの日づくりのことを忘れないうちに宿題の日記に書いていました!(小学2年生の母)

今後の課題と 未来の方向性

新型コロナウイルスの感染状況により活動に制限はありますが、居場所活動や山歩きなどの野外活動、新企画の考察など、今できることをしていきたいと考えています。これからも、集団の中ではなかなか学ぶことができない子どもたちが、自分のペースで好きなことを見つけ、仲間をつくることのできる居場所を継続していきます。また、菓子工房ができたので、菓子作りの仕事を学ぶなど、就労支援も充実させていく予定です。

活動の特長

庭に建てたカフェを居場所に、「ごちゃませ」交流で元気を充電

庭にカフェを建てた2014年から8年間継続している、子どもたちの居場所活動です。一方的な支援ではなく、子どもたちが安心して主体的に楽しみ、自分を持ち、自分の人生を生きる意欲や希望を育める機会を作りたいとの思いがあり、庭に居場所となるカフェを建てました。ここでは、不登校や発達凸凹のある子どもたちとカフェに集う個性豊かな大人たちが「ごちゃませ」な交流を通じて互いに元気をもらっています。

多様性を認め、自分らしくいられる「ごちゃませ」感覚が学びに

例えば、発達凸凹を持つ子どもがプチ・パニックになって田んぼに飛び込んだときでも動じずに対応する大人を見て、子どもたちは「ありのままで大丈夫なんだ」と感じているようです。また、カフェに集う仲間の若いIT企業経営者がプログラミング教室を開き、移動動物園の園長が蛇やカエルなどとのふれあいを演出するなど、「ごちゃませ」の交流からワクワクする学びの場が生まれています。縦でも横でもない斜めの関係性が、自然な形で学びを後押ししています。

大人も楽しみつつ一緒に作ってきた豊富な体験の場が、意欲を喚起

居場所活動「フリースタイルスクール」をはじめ、カフェでの交流や仕事体験、臨床美術アート、園芸療法プログラム、山歩きなどの野外活動、からだと心の運動教室など多彩なプログラムを展開。学習・就労サポートや子育て相談も行っています。もともと相談に来た人が得意分野を活かして教えるケースも多く、大人も無理なく一緒に作るスタイルで内容が充実してきました。子どもたちは、さまざまな体験を通してやりたいことや目標に出会い、得意なことや役割を見つけて自信をつけています。



スカーフを使って体を動かしているのは、富山大学の澤研究室と協働で行う運動教室の一コマです。



「ごちゃませ」交流が講師を輩出。プログラミングや移動動物園など多彩な体験が生まれています。



里山で虫探しをしたり、いろり小屋で焚火をしたり、山歩きをしたりなど、地域の自然とふれあう体験も豊富です。

活動の広がり

庭に建てたカフェから人の輪が広がり、「ごちゃませ」交流を通して笑顔が広がり、ワクワクするさまざまな体験ごとに子どもたちの可能性あふれる未来が広がっています。「みやの森カフェ」の話は書籍化され、全国から見学者が訪れています。他の地域にも、ちょっと立ち寄れる居場所が増えることが期待されています。



みやの森カフェ外観



ある日のランチメニュー



- 協力機関**
- 高岡南福祉会
 - 北陸アドバンスサービス(就労支援協力)
 - 民間の居場所「ひとのま」
 - 富山YMCA
- ほか行政・教育・福祉機関など

みやの森カフェ

理事2名・スタッフ4名ほか アルバイト・ボランティア

- カフェ(ランチ・お仕事体験)
- フリースタイルスクール(居場所活動)
- 各種体験プログラム(山歩き、からだと心の運動、園芸療法ほか)
- 学習サポート
- 子育て相談会
- 認知症カフェ

- 主な活動スケジュール**
- 週3回 木金土 ごちゃませカフェ、月火水フリースタイルスクール(子ども・若者居場所活動)
 - 週6回 学習サポート
 - 月3回 臨床美術アートカフェ
 - 月1回 自然体験プログラム
 - 運動教室
 - 年8回 園芸療法プログラム
 - 月2回 子育て相談会
 - 月1回 認知症カフェ
 - 随時 相談・講座や研修会の企画など



連絡先

- 所在地: 〒939-1406 富山県砺波市宮森303
- TEL: 0763-77-3733
- E-mail: miyanomori.ponte@gmail.com
- ホームページ: https://ponte-toyama.com
- 代表者: 水野薫(代表理事)
- 担当者: 加藤愛理子(理事)

ぬまべしやうがくじゅく
沼辺笑楽寿来【宮城県】

優秀賞

「地域の元気は、地域の子どもの笑顔…」

選考理由

自然と声をかけあうような近所付き合いが希薄になった昨今、昔ながらの地域のつながりを深めています。「地域で子どもを育てる」ことが実践されており、お年寄りとの交流の中で子どもたちは思いやりの心や郷土愛を育てている点が高評価を得ました。

活動の概要と目的

少子高齢化の中、地域で子どもを育てるまち。
小学校というフィールドで、お年寄りと子どもが支え合って活動。

「子どもを隣近所で見なくなった」「昔はもっと子どもがいたのに」…。少子高齢化の今、日本のあちこちで見られる現象が村田町にもありました。

小学校区で地域住民と子どもたちが交流する機会が減り、地域と学校が遠い存在になりつつあった2007年4月、「それなら、自分たち地域住民から学校へ飛び込んでみよう」と始まったのが「沼辺笑楽寿来」の活動です。当初は県の指定事業としてスタートし、沼辺地区の住民と村田第二小学校の力強い連携で14年にわたり継続してきました。

昔ながらの米作りや暮らし方、遊びを伝える年間行事を学年ごとに設定し、小学校のふるさと教育のカリキュラムとして行っています。子どもたちは小学校の6年間を通して地域住民と共に活動し、学校の中に設けられた「沼辺笑楽寿来」専用の教室で休み時間に遊んだり、給食と一緒に食べたりと、日常的に交流を深めています。長期にわたって地域住民の温かさに触れる体験は、子どもたちのこころの成長につながっています。

子どもたちの変化・成長

子どもたちはお年寄りとの交流を通して思いやりのこころや地域のつながりの大切さを学び、人と関わる力を養っています。また、農作業や伝統的な遊びの体験を通して協働のこころや郷土愛が育まれています。



1・2年生の行事「七夕を祝おう」。子どもたちが折り紙の飾りや願い事を書いた短冊を準備し、沼辺笑楽寿来の会員は藁で馬を作り、竹を準備。一緒に飾りつけを行います。



5年生の稲刈り。4月から10月にかけて沼辺笑楽寿来メンバーと子どもたちで米作りをします。2021年度はコロナ禍のため、田植えについてはメンバーで実施しました。

参加者の声

お米の学習で、お米はできるまでとても大変だということがわかりました。そんなお米を食べられる私たちはとても幸せだと思います。(小学5年生)

竹馬はとても楽しいし、今の竹馬より昔の竹馬のほうが乗りやすいと思いました。「転ぶからひもをしっかりつかまないとダメだ」と教えてもらいました。(小学3年生)

しょうがくじゅくのみなさんと「じゃがいもほり」をしました。なれてないから大へんだったけど、教えてもらっていっぱいしゅうかくできました。(小学2年生)

しょうがくじゅくのみなさんが、やさしくいろいろなことをおしえてくれてうれしかったです。いっぱい「おいも」がとれてうれしかったです。(小学1年生)

地域に住む一人の住民として、子どもを持つ一人の親として、地域から見守られ、地域の素晴らしさを教えていただいていることに幸せを感じます。(小学生の保護者)

「田植えの時、ありがとうございました」「七夕の時、折り紙楽しかったです」という子どもたちの一言は、自分たちを動かす大切な魔法です。(沼辺笑楽寿来メンバー)

今後の課題と
未来の方向性

発足当時と会員がほとんど変わっておらず、当時60代であった会員が70代半ばと高齢になっており、今後はどのように世代交代しながら継続していくかが課題です。展開している活動の中には田植え、稲刈りといった重労働を要する作業もあるため、会員に若い世代を巻き込んでいくことを目標としています。

活動の特長

小学校の校舎の中に「沼辺笑楽寿来」教室を設置

「沼辺笑楽寿来」という名称には、笑いながら楽しく学ぶ、年を重ねた人たちが集って来る場所という意味が込められています。子どもたちを育て見守る活動であるとともに、籠もりがちな高齢者が外に出て人とつながる活動でもあるのです。村田第二小学校の校舎の中に「沼辺笑楽寿来」教室も設置。いつ来ても誰かと触れ合える場があることで、学校に足を運ぶ高齢者が増えています。

年間を通して学校と地域がつながる「協働教育」

年に一度のイベントではなく、学校の年間行事として設定されていることで、子どもたちと地域住民は一年を通して交流の機会があり、名前を呼ぶあうほど親しくなります。年々、子どもたちの数は減っていますが、学校と地域がつながる「協働教育」で、昔のような顔の見える関係、自然と声をかけあえる関係が復活し、「地域で子どもを育てる」まちへと変わってきています。

伝統的な農業体験や遊び体験で協働のこころや郷土愛を育む

5年生の農業体験では、4月にお米の話を聞き、5月に田植え、9月に稲刈り、10月に脱穀作業と一連の農作業をすべて体験。脱穀作業では、昔の農機具である千歯こぎ、足踏み脱穀機を使います。3年生では、昔の生活道具や昔の遊びを体験。地域の伝統を伝える役割も果たしています。年度末には、一年間お世話になった子どもたちが感謝の会を開きます。



2年生のじゃがいも掘り。畑を耕し、肥しをふり、畝立てを行う事前準備は沼辺笑楽寿来で行い、じゃがいもを植える、掘る作業は子どもたちと一緒にを行います。



5年生は昔ながらの「千歯こぎ」を使う脱穀作業も体験。初めて使う道具にドキドキしながらの作業です。



3年生は「昔の生活を知る」がテーマ。沼辺笑楽寿来のメンバーに教わりながら、昔の遊び「カンコマ」も体験します。

活動の広がり

沼辺笑楽寿来は近隣の農家の人たちを中心に、行政区長、民生委員、孫が小学校に通う人、地域のボランティアで構成され、現在の会員数は28名。年々、会員の高齢化が進んでいます。村田町社会福祉協議会が事務局となり、沼辺笑楽寿来と村田町第二小学校との地域交流をサポートしています。学年ごとに下記のような行事を行ってきましたが、コロナ禍以降は残念ながら中止されている行事もあります。

沼辺笑楽寿来

近隣の農家、行政区長、民生委員、孫が小学校に通う人、ボランティア (計28名)



村田町第二小学校

年間行事

- 1年生 さつまいも植え セタを祝おう
もちつき体験(コロナ禍前に実施)
- 2年生 じゃがいも植え セタを祝おう
- 3年生 昔の生活、昔の遊び
- 4年生 世代間交流(コロナ禍前に実施)
- 5年生 お米づくり
- 6年生 昔の学校の様子(コロナ禍前に実施)
特別支援学級 柏餅づくり



地域交流

コーディネート
協力

連携

事務局

村田町社会福祉協議会

連絡先

- 所在地：〒989-1321 宮城県柴田郡村田町大字沼辺字寄井89-2 ●TEL：0224-53-9069
- E-mail：murata-syakyou@guitar.ocn.ne.jp
- 代表者：渡辺 安光(会長) ●担当者：根元 健一(村田町社会福祉協議会)



認定NPO法人 ミニシティ・プラス【神奈川県】

子ども目線で地域を取材し、地域を育む「ジュニア編集局」活動

選考理由

紙面づくりを通してさまざまな分野の大人と触れ合うことで、子どもたちにコミュニケーション能力や自己表現力、好奇心、探求心が養われています。地元の大学研究室に加え、区役所、新聞社、販売店など多様な立場の人たちが関わっていることも高評価となったポイントです。

活動の概要と目的

地域の大人と交流し、地域について深く知る活動で子どもたちの表現力、好奇心、探求心を育てる

子どもたちが地域の企業や商店、地域活動、イベントなどを取材し、子ども目線で発信する「ジュニア編集局」活動を、横浜市都筑区とみらい地区の2エリアで展開しています。

毎年公募で小学4年生から高校生までの異年齢の子どもたちが集まります。編集会議では子どもたちが地域で調べたいテーマを主体的に話し合い、取材先を決め、1年をかけて新聞記事を制作します。取材は5～10名で行い、協力大学の学生が同行してサポートします。取材後、子どもたちが記事を書き、企業の協力を得て毎年2月をめどに新聞を発行。2つのエリアの小中学校や商業施設、公共施設に合わせて3万1千部を配布しており、梱包まで編集局で行います。

取材を通して、地域の大人と交流し、地域に愛着を持つ市民を育てる活動です。他地域でメディア編集を行う子どもたちとオンラインで交流する「こどもメディアシンポジウムin横浜」を開催しています。



横浜駅と元町・中華街駅を結ぶ人気路線、横浜高速鉄道みらい線の裏側に熱心に取材する子どもたち。まちを知るとともに、職業を知る機会となります。



他地域でメディア編集を行う子どもたちとオンラインで交流する「こどもメディアシンポジウム2019」。コロナ禍でも可能な活動として2020年度も行いました。

子どもたちの変化・成長

さまざまな分野の大人と触れ合う中でコミュニケーション能力や社会性、地域とのつながり、地域愛を深めているほか、編集会議や取材を通して自己表現力、文章力などの技術も上達し、将来の職業についても考えるようになっていきます。



ジュニア記者に参加して、学校で発表することが得意になった。いろいろな職業があると知ることができた。(小学6年生)

さまざまな施設の裏側を見たり、バリアフリーマップを作ったりする活動は、SDGsの「住み続けられるまちづくり」という目標につながると思う。(小学6年生)

幅広い年齢、バラバラの居住地、それぞれの学校と、多種多様な子どもたちが集まって取材し、記事にする。個性、魅力があふれまくります。(中学1年生)

学校の授業でもはっきりと自分の意見を書くようになり、中学2年のとき作文で県の優秀賞をもらった。将来は書く仕事に挑戦したい。(大学1年生OB)

子ども主体のブレインストーミングや会議の進行、すべてが楽しかった。社会で必要とされる実務的なスキルを無意識のうちに学んだ。(大学2年生OB)

取材先の方とのやりとりだけでなく、NPOの大人や大学生たちとの交流が子どもの「自信」を育ててくれた。(保護者)

今後の課題と未来の方向性

これまでの活動のまとめを東京都市大学の研究室と行い、ノウハウをまとめて、他地域でも展開できるようマニュアルとして公開していく予定です。また、このような活動を広く知ってもらうため、毎年「こどもメディアシンポジウム」を開催していきたいと考えています。これらの活動はコロナ禍でも可能な子どもたちの社会活動として、ぜひ多くの子どもの支援者の方に情報提供したいと思っています。

活動の特長

地域のことを子ども目線でわかりやすく伝える

大人は当たり前を感じていることも、子どもの視点でとらえると新たな発見があることも少なくありません。普段から疑問に感じていた地域のさまざまなことについて調べたり、意見を出しあったり、取材して記事を書いたりすることで地域を深く知ることができます。そんな子どもたちが工夫して書いた記事は、大人にもわかりやすい、読んでもらえる記事として好評です。

子どもたちを温かく見守る「斜めの関係」

親でも先生でもない第三者と「斜めの関係」をつくれるのが編集局活動です。子どもにとって「斜めの関係」とは、ほどよい距離感があり信頼できる年上の人。初めて会う取材先の人、活動を支えるスタッフや大学生、多様な立場の人と関わることで、人に慣れ、コミュニケーションスキルが育っていきます。幅広い価値観や生き方にふれる機会ともなります。

地域に愛着を抱き、社会に関心を持つ大人へ

ミニシティ・プラスでは、「まちはそこに暮らす人、関わる人たちで創り上げていく」との理念から、編集局活動以外にも、子どもがつくる子どもの街「ミニヨコハマシティ」、地域の課題解決を目指す「特命子ども地域アクター」などの事業も行っています。自分が住む地域に愛着を持つことが、社会に関心を持つ大人への一歩になると考えています。



自宅からも参加できるハイブリッド編集会議。子どもたちが会議を進行し、取り上げたい地域の話題、取材したい対象について話し合います。



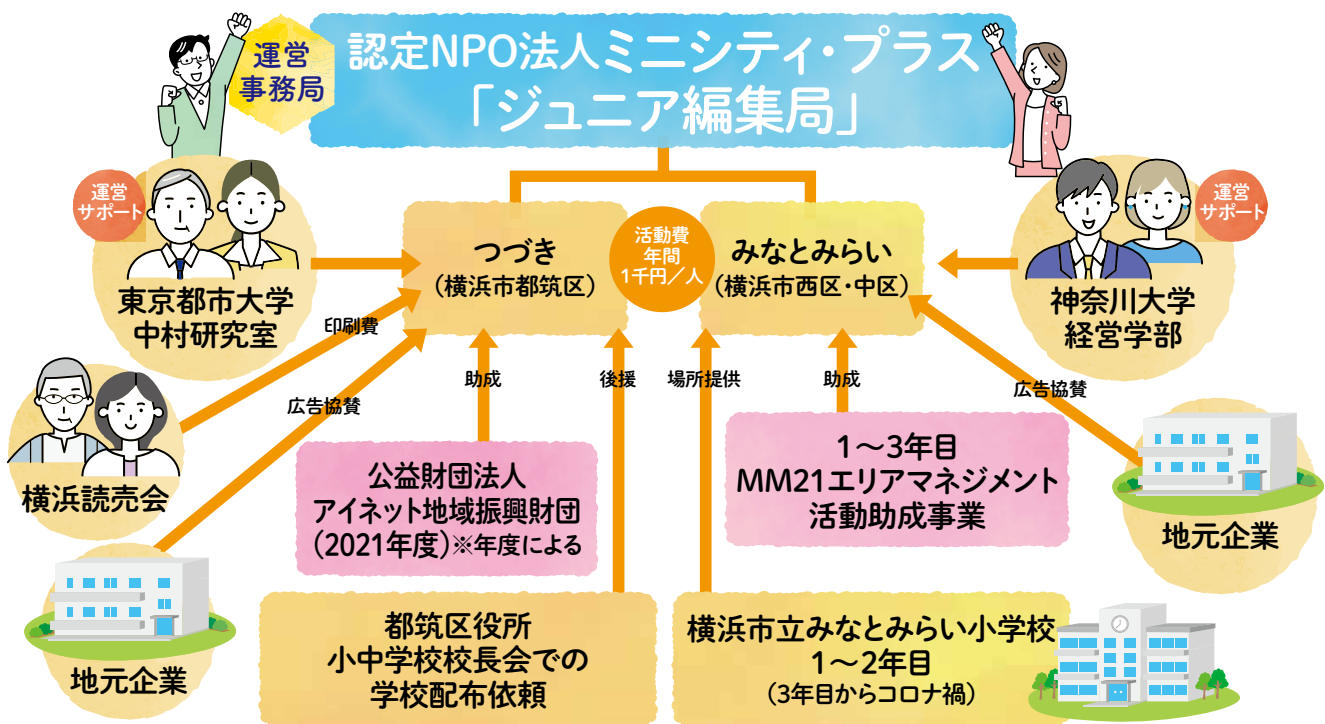
デザイン会社を取材する子どもたち。初めて会う大人と話す貴重な経験です。東京都市大学や神奈川大学の学生が同行して取材をサポートします。



都筑区の区長さんを取材。ジュニア編集局のねらいの一つは「みんなにこのまちのファンになってもらう」こと。そのためまちの魅力を振り起こします。

活動の広がり

横浜開港150周年・都筑区制15周年の節目にあたる2009年、「つづきジュニア編集局」が始動しました。都筑区役所とNPO法人I Loveつづきの協働で、東京都市大学環境情報学部中村研究室の協力を得て運営。2017年からは「MM(みなとみらい)ジュニア編集局」も発足し、2エリア体制で活動しています。MMジュニア編集局は神奈川大学経営学部の協力を得ており、連携先は行政や企業、大学へと広がっています。



連絡先

- 所在地: 〒224-0001 神奈川県横浜市都筑区中川1-17-22ガーデンプラザ宮台402 ●TEL: 090-5405-5149
- E-mail: minicityplus@gmail.com ●ホームページ: <http://minicity-plus.jp/>
- 代表者: 三輪 律江 (理事長) ●担当者: 岩室 晶子 (事務局長)



特定非営利活動法人 インフイーニティー【長崎県】

こどものこどもによるこどものためのまち

選考理由

社会の仕組みを知り、子どもたちだけでまちを運営することで自主・自律のこころや協調・協働のこころが育まれています。不登校や発達障害の子どもたちも受け入れるなど、地域コミュニティーづくりの基盤を育てている点が高く評価されました。

活動の概要と目的

社会の仕組みを体験しながら学べる「まち」の企画・運営・課題解決を通して成長しています

仕事をして給料をもらい、税金を納め、稼いだお金で買い物するなど、社会の仕組みを2日間で学べるこどものまち「ながさKids★Town」を、年に数回17年継続して開催しています。

きっかけは身近に起きた青少年の殺傷事件で、何もできなかった無念さから「子どもたちをみんなで育て合える環境」を目指して始めた居場所づくりでした。そこでの「ごっこ遊び」が発展して現在の形になりました。

企画・運営は、毎年選挙で選ばれる市長を中心に、小学5年生から中学生のスタッフで行います。スタッフは、自分たちで講師を依頼して政治・経済・税金を学ぶほか、フィールドワーク、インターンシップなどの経験をまちづくりに生かしています。毎週日曜に行う準備の場は、子どもたちの居場所にもなっており、初参加の子どものサポートや課題解決への試行錯誤などを通して、自主性や協調性、自己有用感が育まれています。

長く継続する間にはスタッフからサポート側になる循環性も見られ、子どもが子どもを助け、まちを助ける自治の精神が根付いています。



ハローワークで適職を見つけて「まち」で1時間働くこと、通貨10ステラの給料がもらえます。内1ステラを税金で納め、残り9ステラで自由に買い物を楽しめます。



長崎大学経済学部から「経済」を学んでいる様子です。商店街でのフィールドワークやインターンシップ体験もまちづくりに反映します。

子どもたちの変化・成長

初日に課題を話し合い、翌日には改善するなど、まちの運営を通して協調性、コミュニケーション力が生まれ、自信につながっています。また、市に理想のまちづくりを提案して受賞したり、生徒会などでの活躍も見られます。



参加者の声

税金や社会の仕組みを学べたり、積極的に働く先輩方の姿を見ることができてスタッフになってよかったです。何より、スタッフの活動は楽しい。(中学2年生)

学校に行くのが辛かったけど、先輩が話を聞いてくれたりして乗り越えることができました。今度は支える側になりたいと思うようになりました。(中学3年生)

子どもスタッフで力を合わせてやりたいことを形にしていくな楽しさを学びました。信頼できる家族のような仲間に出会えたことがとてもうれしいです。(高校1年生)

学校に通うだけでは学べない社会の仕組みを学び、かけがえのない仲間と試行錯誤して一つのことを創り上げたことがすごく貴重な体験になりました。(高校3年生)

小学6年から参加し、中学3年時はイベント運営を主となって行いました。当時の反省は幾つかありますが、それも学びです。参加してよかったです。(大学1年生)

活動を通してコミュニケーションをとることや人前に出ることが積極的になったように感じます。また、さまざまな方の話が進路決定に役立ちました。(大学2年生)

今後の課題と未来の方向性

コロナ禍で以前通りの活動が難しい中、不登校や生活に関する相談が増えました。そこで、SDGsや子どもの貧困などの社会の課題を、自分たちで解決する形に展開します。コミュニティガーデンづくりなどの野外活動を増やして農作業などを加え、働いた報酬の通貨「ステラ」で食べたり、買い物したり、学んだりできる場を毎週開催する予定です。また、企業のサステナブル会議に参加するなど、社会に参画できる仕組みや、「ステラ」が利用できる企業の開拓も目指します。

活動の特長

継続の秘訣は、憧れる先輩の存在

活躍する子どもスタッフの姿を見て「自分もスタッフになりたい!」と志願する子どもが絶えないことが、17年の長期にわたり活動が継続している秘訣と言えます。さらに、スタッフを経験した高校生や大学生がサポーターとして関わる姿がロールモデルにもなっており、安心できる環境の中でスタッフは自由に活動しています。また、サポーターたちはSNSのグループをつくって情報交換し、子どもスタッフには議事録などで情報が行き渡るよう工夫をしています。

仲間と目標が育む自主性・協調性・思いやり

スタッフは、政治・経済・税金などについて自分たちで講師を招いて学ぶほか、商店街などへのフィールドワーク、企業へのインターンシップなどにも積極的に参加し、体験をまちづくりに生かしています。準備においては、理想のまちへの話し合いや実作業を通して、チームワークや協調性が育まれています。当日は、初参加の子どもでも仕組みを理解できるように、文書や口頭での説明に加えて相談員を配置し、適性に合わせた職業案内をするなど、思いやりのこころが育まれています。

いろんな子ども、いろんな意見歓迎! ここが居場所に

毎週、長崎シビックホールを拠点にさまざまな思いを抱えた子どもが集まり、会議や準備などを進めています。活動には、思いを声に出せる自由や、失敗しても支えてくれる人がいる安心感、存在を認められる肯定感があり、課題を解決しながら「まち」を運営した達成感、自信となっています。参加したスタッフはみんな「居場所ができた」と口にしており、多くの不登校児が学校に復帰できています。



選挙で選ばれる市長を中心に、自分たちで決めたルールのもと活動しています。写真は市長選の様子です。



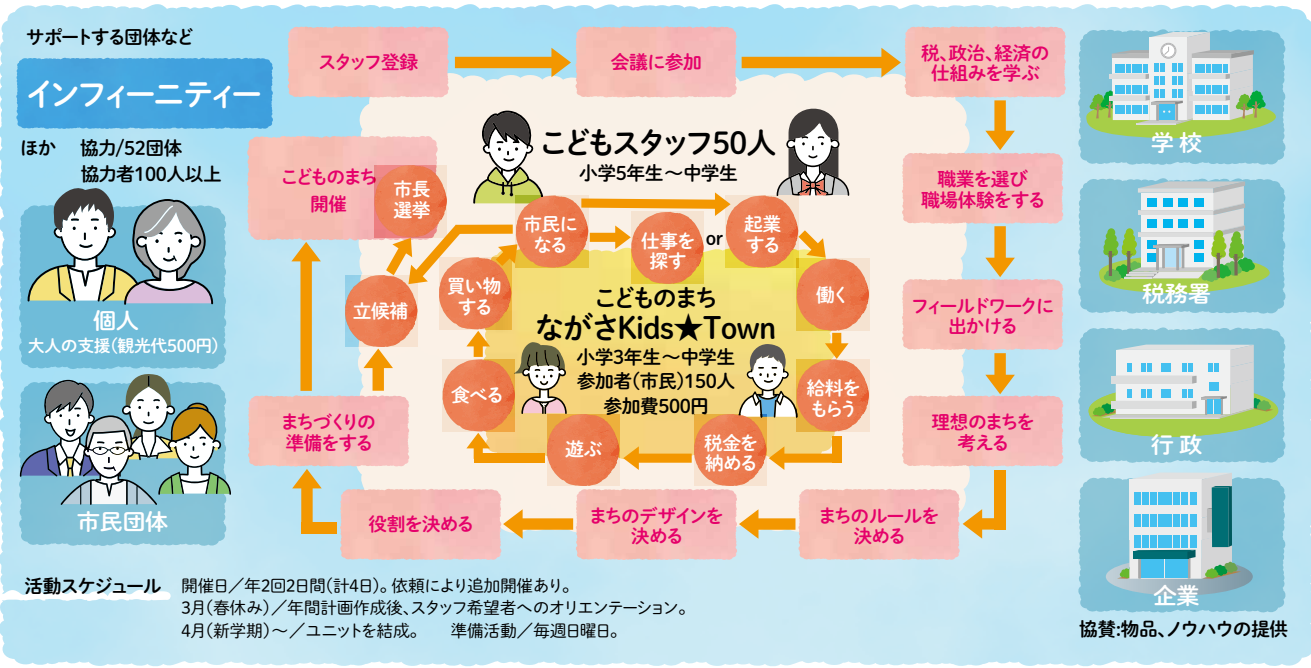
内容に合わせて効果的な色やデザインを考え、工夫し協力しながら看板やポスターなどを作り上げます。



毎週末に会議や作業を実施。いろんな事情を抱えて参加している子どもたちの居場所にもなっています。

活動の広がり

活動は、高校生や大学生のボランティア、協力先の税務署や企業の方々に支えられています。数年前から、租税教育に適した活動として法人会や行政から依頼を受け、「こどものまち」を開催する機会が増加。また、「平和祈念式典」前夜に行われる「平和の灯」イベントでは、キャンドルづくりや案内のボランティアに携わり、平和大使として国際連合欧州本部(ジュネーブ)に核兵器廃絶の声を届けに行く大役も果たしました。



●所在地: 〒850-0843長崎県長崎市常盤町1-1 メットライフ生命長崎ビル ●TEL: 095-822-8161
 ●E-mail: civichall8@kvd.biglobe.ne.jp ●ホームページ: http://civichall.jp/
 ●代表者/担当者: 野口美砂子(理事長)

歴代全国大賞受賞団体



特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター (島根県)

テーマ▶ げきじょっこまつり 初めての買い物



社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会 (大阪府)

テーマ▶ あなたも私も笑顔になる～子ども福祉委員～



特定非営利活動法人 パノラマ (神奈川県)

テーマ▶ 高校内居場所カフェ
～先生でも親でもない大人がいる、文化的シャワー提供の場～



長野市立城東小学校 (長野県)

テーマ▶ 共に学ぶ長野ろう学校との41年目の交流活動
～共生社会の形成に向けて6年間の継続交流～



和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部 (和歌山県)

テーマ▶ 地域に根ざし、地域に貢献する高校生リーダーを目指して



かつの はちまんたい
鹿角市立八幡平中学校 (秋田県)

テーマ▶ 郷土愛を育み、人間関係力を培う八幡平ボランティアガイド



みなみよしなり
仙台市立南吉成中学校 (宮城県)

テーマ▶ 大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育



いずみみなみ
熊本市立出水南小学校 (熊本県)

テーマ▶ 小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動



東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊 (兵庫県)

テーマ▶ 地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動



いしぐね
石榑の里コミュニティ (三重県)

テーマ▶ 地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による
組織づくりと協働活動

2010
年度

特定非営利活動法人 オバパト隊 (熊本県)

テーマ▶ 高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり

2009
年度

山形県立置賜農業高等学校演劇部 (山形県)

テーマ▶ 農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル

2008
年度

公益社団法人 群馬県助産師会 (群馬県)

テーマ▶ 子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」

※過去の受賞活動の詳細はホームページで紹介しています。



パナソニック教育財団について

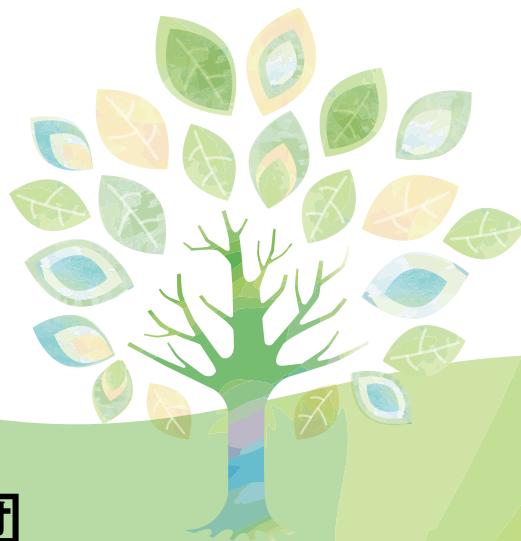
パナソニック教育財団は、「世界中の皆様の『くらし』の向上と社会の発展に貢献する」を基本理念とするパナソニックグループの出捐により、視聴覚教育の振興を目的に1973年に設立されました。

現在、私たちを取り巻く社会は、工業社会から情報社会へ、さらに[Society5.0]と言われる超スマート社会へと進む変革の中にいます。世界的な感染症の拡大により、政府が推進する「GIGAスクール構想」にも拍車がかかり、ICTを活用した教育の重要性が再確認されています。

一方、豊かな未来の創造のためには、子どもたちが自分、他者、社会に向かう、豊かな「こころ」を育むことも重要です。

パナソニック教育財団では、創立以来の事業である学校現場における「ICTを活用した実践研究助成」、及び、「子どもたちの「こころを育む活動」の表彰」という2つの事業を柱に次世代の育成支援に取り組んでいます。

私たちはこれからも、築き上げてきた研究成果と、教育分野や社会福祉分野で活躍する方々との絆を大切に、子どもたちの「未来をつくる創造力と豊かな人間性」を育むための一層の努力を重ねる所存です。



公益財団法人 パナソニック教育財団

〒105-0001
東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100 FAX.03-5521-6200
ホームページ <http://www.kokoro-forum.jp/>

ここを育む

